



(はあ……今日も混んでるなあ)

フレアは溜め息を漏らしながら電車に乗り込んだ。

夕方頃、帰宅ラッシュの時間帯になるとこの路線はいつも満員だ。

フレアは人並みに揉まれながら車両の隅にポジションを確保し、あとは目的駅に着くまでひたすら耐えた。ふしゅーっとコンプレッサの音がして、ドアが閉まる。電車がガタンゴトンと動き出し、車掌のアナウンスが響き渡った。

(うう、相変わらず冷房の効きが悪いなあ……家に帰ったらシャワー浴びなきゃ)

フレアはセーラー服の襟を摘んで、ぼたぼたと仰いだ。

彼女はホロライブ学園の二年生で、そのエキゾチックな美貌と抜群のプロポーションのせいで生徒、教師を問わず多くの男達のオカズにされている。

そんなドスケベボディが満員電車になど乗ったらどうなるか。

痴漢されるに決まっていた。

実際、フレアはこの路線を利用するようになってから毎日のように痴漢に遭っている。

もちろん今日だって例外じゃない。

「……んっ」

お尻に何かが触れ、フレアは身を振った。

度重なる経験からフレアは、それが故意か偶然かくらいはわかるようになっていた。

間違いない——これはわざとだ。

しかし、下手に騒ぐようなしない。

痴漢されたことを周りに知られるのが恥ずかしいし、それに——変な話だが、フレアはもうこれくらいは慣れっこだった。

(我慢、我慢……ちよっと触らせてあげれば満足するでしょ……)

そう思っていたのだが、今日の痴漢はいつもと違った。

指先がスカートの中にまで伸びてくる感触に、フレアは目を丸くした。

(えっ……ほ、本気?)

こいつ、スカートの中にまで……ちよっと、やだ、揉み

しだかれてる……!!



大きな手が、フレアのデカケツを好き勝手に弄んだ。ただ力任せに揉むのではなく、五指が連動してマッサージをするように尻肉を愛撫し、フレアに困惑と、未知の快感を与えていた。

今までは、痴漢なんてされても気持ち悪いだけだったのに――男の指は次にフレアの股ぐらを目指した。パンティを押し込むように、割れ目をぐりぐりと擦られる。

「ひゃ……ん、んんっ……♡」

アソコが湿り気を帯び、痴漢の手が濡れていく。

男の行為はどんどんとエスカレートしていった、とうとう下着の中にまで指先が侵入してきた。しつとりと濡れそぼった膣穴に、人差し指と中指が「にゅるんっ♡」と入り込んでくる。

フレアを、容赦ない手マンが襲った。

とんでもないテクだった。

電流のような快感が思考回路をジャックする。

瞬く間に愛液が内腿を滴り、床に向かってぼたぼたと垂れていく。

「んほっ……♡ おお、お……ほオオ………ッ♡」

必死に手を口で塞ぐも、下品な声が漏れ出してしまふ。

そしてついに、フレアは絶頂へと達してしまった。



「……………ッ♡♡」

腰がびくびくと跳ね、噴き出した愛液がドアにびちゃびちゃと降り注ぐ。

(う、嘘お……♡ あたし、電車の中で……お、お潮噴いちゃったあ……♡)

フレアは痴漢に憤るより、自らの身体の淫乱ぶりに愕然としていた。膣内で暴れていた指が引き抜かれ、フレアはようやく解放された。しばらくは乱れた息を整えるのに精一杯で、それ以外は頭が回らなかった。やっと背後を振り向いたときにはもう、痴漢は既に姿を消していた。

だが、これで終わりではなかった。

むしろ始まりと言えよう。

フレアは完全にターゲットとしてロックオンされてしまったのだ。

§

最初の痴漢から一週間が経過した。

学校からの帰り——今日も電車は満員だ。

落ち着かない様子でフレアが乗り込むと発車から間もなく、いつものように魔の手が伸びてきた。

「ひんっ♡」

挨拶代わりのボディタッチ。今日は胸だった。

絶妙な力加減でフレアの気持ちいい場所を愛撫して、否応なしに感度が上昇していく。服の上から円を描くような指使いで乳首を刺激され、つんと尖った突起が傍目にもまるわかりだった。

(こ、こいつ♡ あたしが抵抗しないからって、毎日こんな……♡)

フレアにはぎゅっと唇を噛み、嵐が去るのを待つことしかできない。

今日もまたイカされてしまう——そう思っていた。

しかし、

「くくく……もうすっかり従順だなあ？」

今までずっと無言を貫いていた男が、不意に話しかけてきた。

男の手は今もフレアの乳首を弄んでいる。

フレアは快楽を堪えながら、精一杯強気な表情を作った。

「じゅ、従順って、誰が……調子に乗らないで、痴漢のくせに……んんっ♡」

「お、まだそんな口が利けるのか。最近の根性ないメスガキにしちゃ頑張るじゃないか。関心関心……ふふ」

「ふ、ふざけたこと言っていないで、手を離して……んうっ♡」

「いいのか、手を離しても？ 半端なところで寸止めされると辛いぜ？」

「余計なお世話よ……そ、それに、胸だけでイくなんて、そんなことあるわけ……♡」

「あるんだなあ、これが」

「ンほおおっ♡」

セーラー服の中にまで男の手が入ってきて、フレアのデカパイを鷲掴みにした。乱暴かつ繊細な手つきで勃起乳首を責められ、フレアの頭が白くなっ
ていく。既に自力で立つことはできず、男に支えられることで辛うじて倒れずに済んでいた。

(にや、にやにこれええ♡ 乳首って、こんなに気持ちよくなるんだ♡ 自分で触るのは、比べ物にならなっ……んんんっ♡ だめっ、込み上げてくる♡ 気持ちいいのが、体の奥から♡ イ、イ……イカされ、ちゃう♡)

今まさにフレアの股間からイキ潮が噴き出す直前だった。

いきなり、男の手がフレアから離れた。

「……えっ？」

思わず振り向いたフレアが見たのは、男の意地悪なニヤニヤ顔だ。

「ま、やめろって言うなら、今日はこのへんにしといてやるよ」

あっさりと引き下がった男は、次の停車駅で振り返りもせずの下りていった。その後ろ姿に向かって、フレアは知らず知らずのうちに手を伸ばしていた。

この日以降、男のやり口が変わった。

フレアを痴漢するのは同じだが、最後の一押しを与えてくれない。いつも、アクメを決める寸前でお預けを食らってしまうのだ。その辛さたるや、気が気じゃなかった。

とはいえ、自分から痴漢を求めるようなことは言えない。

だからフレアは今日も、家に変えると狂ったようにオナニーをした。

「あひっ♥ シンシンッ♥ おまんこっ♥ おまんこ痺れ……あああっ♥
あいつのせいで、あいつのせいでこんなに敏感に……オほおお♥ ぐちゅ
ぐちゅえっちな音止まらないいい♥ おまんこほじくるのきもちよすぎる
ううう。う。うっ♥」



ベッドのうえでのたうち回るようにして、自らの秘部をめちゃくちゃに掻き回す。

フレアは元々性欲の強いタイプではなく、オナニーなど今までに数えるくらいしかしてこなかったのだが、ここ最近は何日のように自分を慰めていた。電車の中で溜まりに溜まったムラムラを解消しないことには一睡もできなかった。

「あ、あっイくうっ♥ おまんこイくっ♥ おまんこイぐのおおおおお——ッ♥」

フレアは大きく身体を仰け反らせると、馬鹿みたいに腰をへこつかせながら「ぶっしゅああああああ♥」とおまんこ汁をぶち撒けた。これで今日は四度目のオルガスムスだ。シートはもうびっちょびちよびちよになっていた。

それなのに、どうしても、足りない。
すっかり肥大化したクリトリスが切なそうに震えている。

「はあ、はあ、はあ……♥」

自分で何度オナニーをしても満たされない。

フレアの身体はもう、あの男に骨の髄までの調教を許していたのだ。

最初は忘れようとしていた。

でも忘れられなかった。

フライドさえ捨てれば、この渴きを癒やすことは容易いとフレアは理解している。

「欲しい……欲しいよお……♥」

オナニーを繰り返すほどに、フレアの情欲は際限なく燃え上がっていった。

§

次の日。

電車に乗り込むと、男はいつものようにフレアの背後に立った。

「フレアちゃん。今日も遊ぼうねえ」

どうやって調べたのか、男はいつの間にかフレアの名前を知っていた。

スカートをべらりと持ち上げて、煮卵のようにツヤツヤの褐色尻を思うままに揉みまくる。その卑猥な手つきにフレアはスケベな声を誤魔化せない。

フレアはもう、彼に触られるだけでも喘いでしまうようになっていた。

フレアは悔しそうな、それでいて何かを期待するような顔で、すっとお尻を突き出した。あたかも、触ってくださいと言わんばかりに。

「おやおや？ どうしたんだあ？ 今日はやけに積極的だなあ？」

「か、勝手なこと言わないでよ……あたしは別に、何も……」

「こんなにケツを押しつけといて、何もってことはないだろお。しかもそこ……俺の股間だぜ？ フレアちゃんの尻の間に俺のが挟まってるの、わかるだろ？ あーもう、こんなぶりぶりのデカケツに叩かれたらあっちゅーまに勃起しちゃうよ」

「あ、すごっ……おっきい♥」

「だろ？ サイズにや自信あるんだよねえ」

「あんっ♥ 熱くて硬いのが、お股に擦れて……はあっ、んう♥」

「へへ。電車中でちんぽおっ勃たせてるのバレたらまずいからなあ。フレアちゃんの股の間に隠れさせてくれや」

「はうううっ♥ 割れ目に、おちんちん当たってるう……♥」

フレアはデカ尻をぐいぐいと男に押しつけ、もはやどっちが痴漢かわからない有り様だ。男の股間から突き出した男根がフレアのおまんこをパンティの上から刺激して、背徳的な興奮を伴う快感が一気に駆け巡る。

このままならきつと、最高のアクメを迎えることができる。

それなのに――男は矢張り、お預けをしてきた。

不意に男の体温が離れ、フレアは寂しそうに「あっ……」と呻いた。

フレアの耳朵に、男の粘っこい吐息がかかる。

「やれやれ、大声出しやがって。見つかったら大変だからなあ……今日はこのへんで終わっとこうや、な？」

「い、いやっ……♡」

フレアは半身を返して男の手を掴み、自らの股間へと導いた。

「お、お願い♡ もう意地悪しないでえ♡ あなたにずっと、イかせてもらえなくっておまんこ辛い♡ もう生意気なことは言わないから、お願い、最後まで……最後までしてえ♡ ううん、してください♡」

男は、その言葉を待っていたのだろう。

口端を邪惡に吊り上げて、極上の肉オナホをゲットしたことをほくそ笑んだ。

「しょうがねえなあ……そこまで言われちゃ、悪い気はしねえ」

男はフレアの目の前でゆっくりとファスナーを下ろして、

「おい、股あ開け。ンで、自分でパンツ下ろすんだ」

「は、はい♡」

フレアは期待に目を潤ませながら、言われるがまま動いた。電車のドアに持たれて蟹股となり、パンティを勢いよくずり下ろす。

男がナニをしようとしているのか、このままではナニをされてしまうのか。

フレアはすべて正しく理解していた。

そしてそれを望んでいた。

男が両手でフレアの腰を掴み、いきり立つ肉の棒が「ずぶぶぶぶぶぶっ♡」とフレアの中に突入してきた。



「おほおおおおオオオ……♡ は、入って、くりゅ♡ あたし、電車の中で痴漢とセックスしちゃってるぅ……♡」

入り込んできたちんぽがやがて膣奥を叩き、フレアは「おんっ♡」と目を回した。

男はフレアをドアに押しつけ、まるで恋人のように熱烈な抱擁を交わしながら、リズムよく腰を振った。フレアの弱点は、とくに彼に知られている。だからこのピストンも、フレアの気持ちいい場所を執拗に突いてきた。

「ンほおおおっイぐうう♡ 痴漢ちんぽで簡単にイカされりゅうううう♡」

挿入からどれほど経ってないうちに、フレアは絶頂を迎えた。電車の走行音に混じってびちゃびちゃと水音が混じり、周囲の乗客がなんだなんだと不思議そうな顔をしているが、関係ない。

フレアも男に抱きついて盛んに腰を振った。

「ほら、どうだあ？ こいつが欲しかったんだろお？」

「う、うん♡ 欲しかった♡ これが欲しかったのおお♡」

「じゃあ、お礼を言わないとだよな？」

「ひゃ、ひゃい♡ あたしのスケべまんこに、遅いおちんぽ様を恵んでくださってありがとうございますぅううう♡ ちゅ♡ ちゅ♡ ちゅ♡」

「お、誠意ってもんがわかってるな……んちゅ、れろ」

フレアは頭で考えるより早く、身体が求めるがまま、男に唇を重ねていた。ようやく男の意地悪から解放されたフレアは、今までの鬱憤を晴らすかのように絶え間なくちんぽを貪った。おかげで好きなだけイキ散らかすことができる。寸止めやお預けをしない彼に、フレアは本気で感謝してしまっていた。

すると突然、男のちんぽが火を噴いたように熱くなった。

「ンひいいいイイン♡ 中に出てるううううう♡」

どくんっ♡ どくんっ♡ どくんっ♡

フレアの子宮に、誰とも知れぬ痴漢の子種汁がたっぷりと注がれた。

フレアはもう子供じゃない。こんなことをされては赤ちゃんができてしまうことを、当然知っている。だが、この圧倒的な肉悦の前では妊娠の危険性などどうでもいいことだった。

（これ、しゅごっ♡ なかだひっ、きもちよしゅぎる♡ 熱々のおちんぽミルクが子宮をばんぱんに埋め尽くして……あああつ、こんなのオナニーじゃ味わえないよおお♡ こんな覚えちゃったら戻れなくなるううう♡）

そのとき、スピーカーから車掌のアナウンスがあり、電車が減速を始めた。次の停車駅が迫っているようだが、それはフレアの目的駅ではなかった。しかし男はフレアの細い顎をくいっと持ち上げて、

「おい、次で下りろ」

「へっ……」

「近くに馴染みのラブホがあんだよ。夜通し犯してやるから覚悟しな」

「そ、そんなこと言われても……急に外泊なんて、親になんて言えば……」

「ンなこと知らねえよ。いいから来い」

「ンぐお♥」

まだおまんこに入りっぱなしだった逸物が、ごつんとフレアのポルチオを叩いた。何度も、何度も——何度も、何度も——こうすればこの女は言うことを聞くと、わかりきっているかのように。

「おら、返事は？」

「は、は、はいっ♥ 全部あなたの言う通りにしますうう♥」

フレアはパンティを電車内に置き去りにして、股ぐらから痴漢の精液を垂れ流しながらラブホテルへと向かった。そして部屋に入ると、シャワーなど浴びる間もなく動物のような交尾が始まった。

そしてフレアは、電車内でのセックスなどお遊びに過ぎなかったことを思い知る。

「ンほおお おお おッ♥ おッ♥ おッ♥ おオッ♥」

「くくく、お前、ほんといい声で鳴くなあ。ここでなら好きなだけ喘いでもいいからな？」

「はいっ♥ はいいいいい♥ ちんぽ♥ 奥にどちゅどちゅ当たるう♥ さっきよりも激しいよおおおお♥ 男の人の本気ピストンしゅごしゅぎイイ♥ イぐっ♥ イぐうう♥ こんなにイくに決まってるりゅうううう♥」

考えてみれば、フレアはこの男の素性を何も知らない。名前すらもだ。他人からすれば電車の中で痴漢を働いただけの犯罪者でしかない。そんな男のちんぽに、フレアは本気の本気で恋をしてしまった。

「もっとお♥ もつとちようだあい♥ フレアのおまんこはあ、もうあなたの専用ちんぽケースだからあ♥ ぶっ壊れるまでハメ潰してえ♥ もちろん、お射精はぜいぶんぶ中でいいからね♥」

「そりゃあいいや。ちようど女子高生型の肉便器が欲しかったんだよなあ」
「ひゃい♥ 便器、便器♥ お便器い♥ あたしをあなたの肉便器にしてええ♥」

「ふひひ……マジちよれーわ。普通に攻略しようと思ったら難易度激高のS級女でも、おまんこ直通ルートで落とせば楽勝だもんなあ。つよつよちんぽに生まれてマジでよかったー」

男は恍惚の表情でガンガンと腰を突き上げ、精液が込み上げてくればなんの躊躇いもなくそれを放った。

「ほれ、中に出すぞオナホ女！」
「ほひひひひん♡ た、種付けきちゃああああ♡ これが一番気持ちいいのオオオ♡」

ぶびゆるるるるるるるるるるるっ♡

フレアは知性も品性もすべて喪失した、馬鹿丸出しのアへ顔で男の性奴隷に成り果てた。何度も何度もザーメンを注がれ、果ては小便まで流し込まれても、フレアにとってはすべてが身を焦がすような快感だ。
男は宣言通り、夜を徹してフレアを犯し続けた。



「おらっまた出すぞ！ まんこ食いしばれ！」
「ンほおおおオオオオ——ッ♡」

甲高い絶叫を上げ、もう何度目かもわからない絶頂に酔いしれるフレア。数時間ぶりにちんぽを引っこ抜かれると、肉壺から大量の精液が「ぽびゅっ♡」と飛び出してきて、しばらく止まることがなかった。そのあいだ、フレアはずっとアヘアヘ言いながら幸せそうにしていた。

「ふうう、使った使った……くっそ出たわ。搾精能力高すぎだろ、この無料オナホ」

「あへ……あへえ……♡」

「おい、いつまでもアへってないで記念撮影すつぞ。ほれ、自己紹介してみ？」

男はフレアの顔面に学生証で隠し、ダブルピースを要求した。
スマホを突きつけて録画を開始する。

「ホ……ホロライブ学園、二年♡ 不知火フレアです♡ 今日からこの……素敵なおちんぽのご主人様の肉便器になって、妊娠確実のぶっ濃いザーメンをお腹いっぱい注いでいただきました♡ これからずっとご主人様に都合のいいオナホとして使われるんだと思うと……ああっらめえ♡♡♡ 想像しただけで、イク♡ イきゅううううううう……」



New♡の便器ぐっ記に♡











おたんぽ調教
完了(有)



の好物♡

正正正下

New 公便器ゲット記念日